

学位論文審査の要旨

学位申請者	林 いのり 比較社会文化学専攻2019年度生	論文題目	歌唱旋律の変化にみる歌劇《シモン・ボッカネグラ》改訂の劇作法ー 詩行韻律と音楽の関係性を中心に ー
審査委員	主査:	井上 登喜子 准教授	インターネット公表
	副査:	小坂 圭太 教授	
	副査:	浅井 佑太 助教	
	審査委員:	浅田 徹 教授	
	審査委員:	森田 学 准教授 (昭和音楽大学)	
学位名称	博士 (人文科学)	学位論文の全文公表の可否 :	否
(英語名)	(Ph. D. in Musicology)	「否」の場合の理由	<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある <input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている <input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
			※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、19世紀イタリアのオペラ作曲家ジュゼッペ・ヴェルディの歌劇《シモン・ボッカネグラ》の劇作法について、初稿(1857年稿)から改訂稿(1881年稿)への歌唱旋律の修正の分析を通して論じたものである。従前の研究でも本歌劇の改訂への注目はなされてきたが、それらの先行研究に対し、本論文は、歌唱旋律の書法の変化を、台本詩行の修正との関係から分析・検証した上で、《シモン》改訂における歌唱旋律の音楽的・演劇的な機能の変化を実証的に論じたものである。

序章では、初稿(57年稿)と改訂稿(81年稿)の成立経緯や初演時の受容を比較し、各稿の台本作家(ピアヴェとボーイト)の関与をはじめとする制作過程の差異や、歌唱旋律に対する当時の反応という複数の要因が、両稿のテキストの違いに反映されていることを確認した。

本論は3章で構成され、3つの観点から歌唱旋律の変化が論じられる。第1章では、詩行韻律と音楽アクセントを分析し、ヴェルディが音楽アクセントの操作によって、「歌われる台詞」の口調表現を書き分けたことを明らかにした。第2章では、19世紀イタリア・オペラに慣習的な楽曲(場面)構造である「定型 La solita forma」の修正部分を分析し、ヴェルディの修正の目的が、「閉じた」楽節で構成された音楽劇を、「出来事」の連続という「開かれた」構成へと再編成すること、その連結の役割を歌唱声部に持たせることにあったと論じた。第3章では、オーケストラや視覚的效果と合わさった際に創出される歌唱表現について論じ、ヴェルディが劇的な緊張感の高まりを、音響面で差異化するために用いた手法を明らかにした。

以上の分析を通じて、本論文では、《シモン》改訂における歌唱旋律の変化には、個々の楽節レベルの修正においても、劇の全体構成の変更においても、歌手の発音、歌唱表現、演技と関わる「朗唱」の音楽的・演劇的な機能が見出されたことから、ヴェルディが改訂によって目指したのは、「歌唱を主体とした音楽劇」であったと結論付けた。

2023年12月11日に開催された第1回審査委員会では、ヴェルディ・オペラの一次資料ならびに19世紀イタリア・オペラの作劇法に関する膨大な先行研究を網羅的に踏まえた上で、これまで手薄だった台本の詩行韻律と歌唱旋律の分析を軸に、《シモン》の改訂と劇作法に関する新たな研究成果をもたらしたことが評価された。一方、結論で《シモン》改訂の意義と、19世紀イタリア・オペラ史における位置づけをより明確に加筆すること、イタリア詩の規則や音節をめぐる記述をさらに厳密に行うことが求められた。申請者はこれらの指摘に対して真摯に修正を行い、審査委員会では修正が適切に行われたことを確認した。2024年2月9日に実施された公開発表会において、申請者は論文の概要を明快に説明し、参加者からの質問に適確に回答を行った。同日行われた最終試験では、申請者に専門分野についての十分な知見があることが確認された。よって、審査委員会は、申請論文を審査委員会全員一致で合格と判断し、博士(人文科学)、Ph.D. in Musicologyの学位を授与するに相応しいものと判断した。